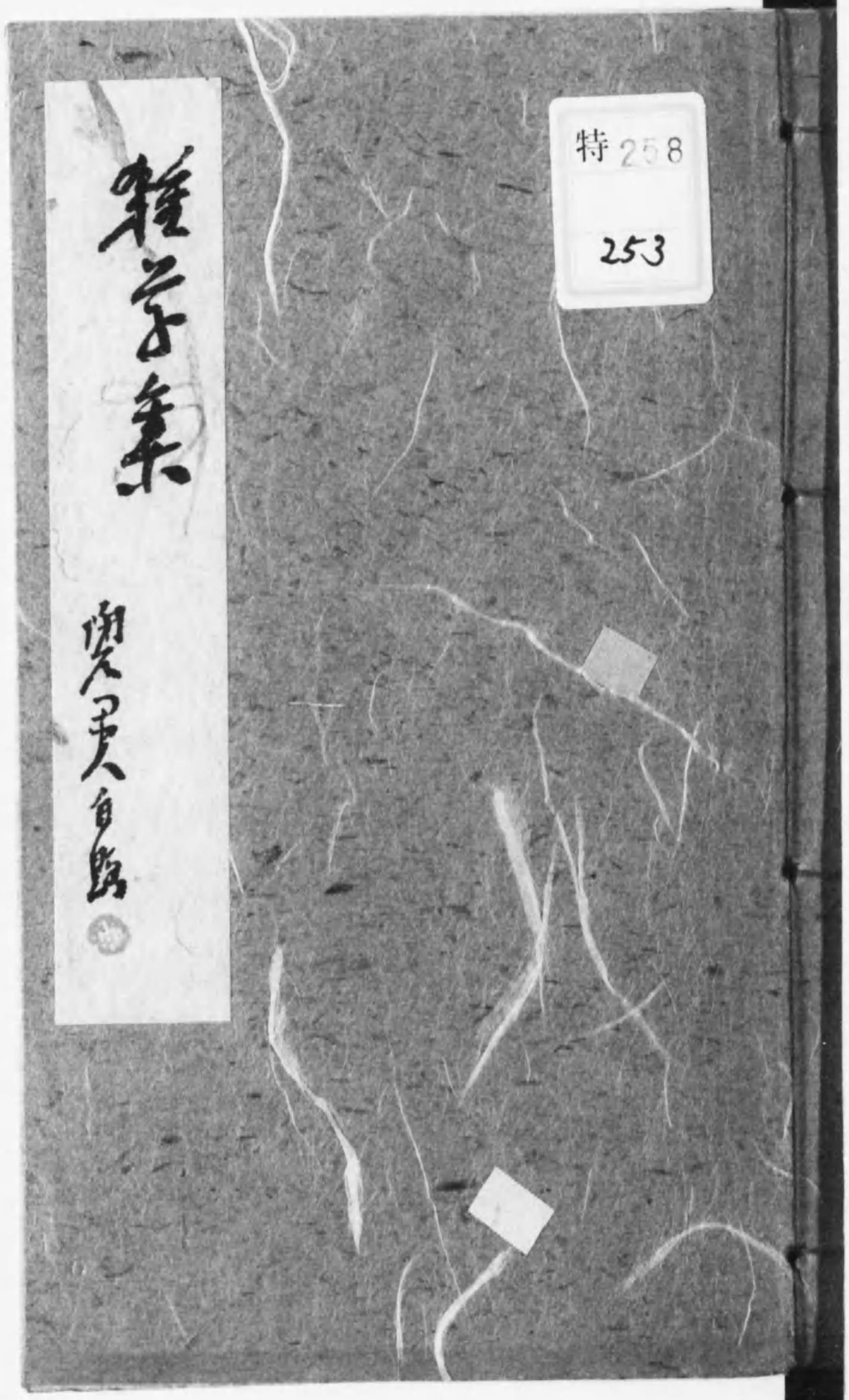


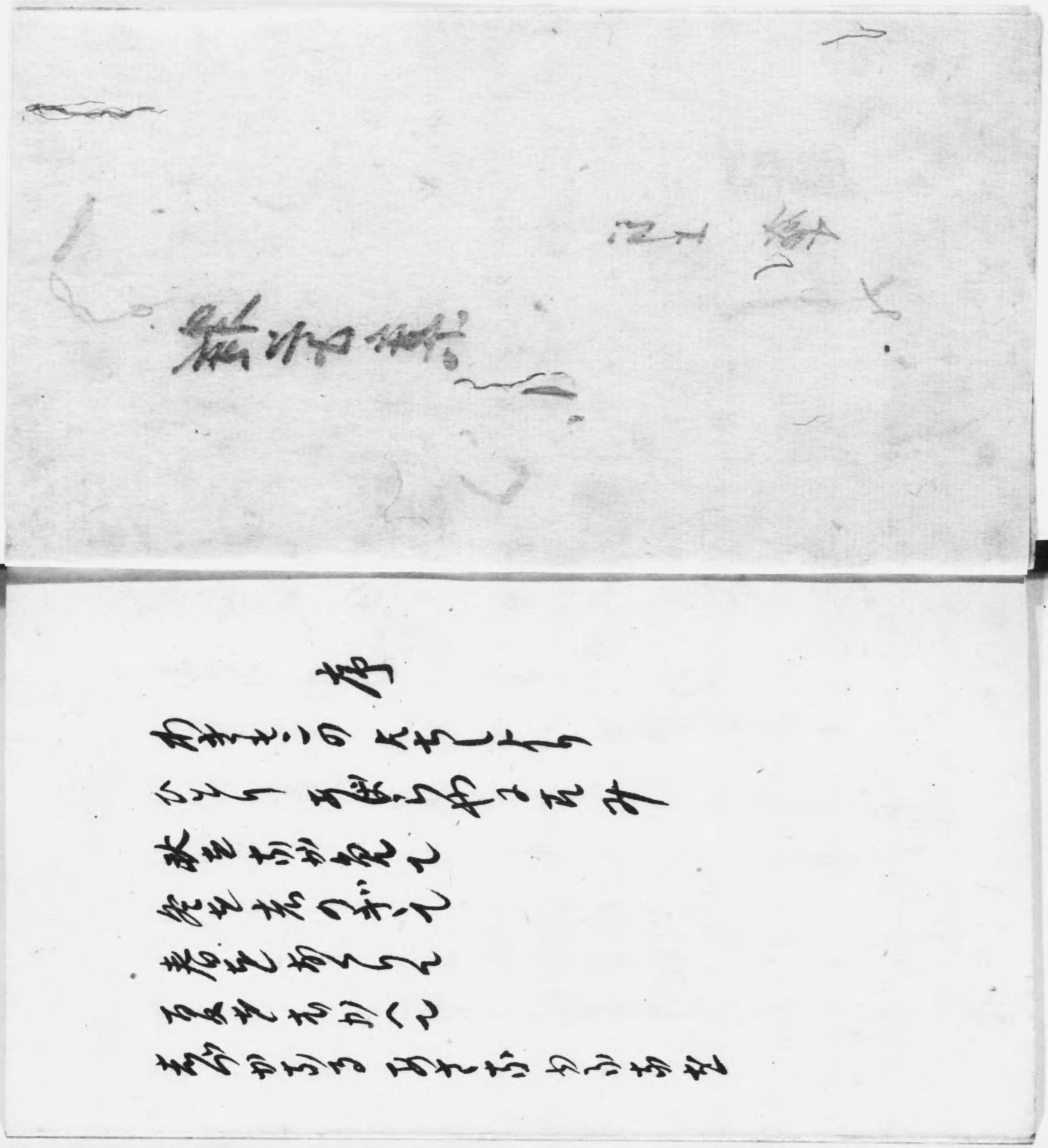
特258
253

始

特258
253

雅堂集

沖上峯



おきふしのこころのうるはしき はちもいらかぜ
かぶはきかももちをあひーらみ もえいぶぐさ
くさぐさの ちこぐさ
ひあぶもややきかーきを
ふくうみすう はちみうーう

○大きみ立てる妻を思ひて

ちこの夜みて 長浜する 高く大きみ立てち
夜ちかく 雨ふりしかも (六月七日)

からくるま あくこの船みなち海ふかく ここち
馳せらむ 北と南て (七月)

今日や鳴鏑紅色降り注ぎ 砲弾の
平星 空を見ちらむ
さ夜ふりて奉天義士の寝
脱ぬ――て差かい沙河に

（七月星）

○削風

鋤耕 金土
有土力疲
而作出落
不離農時
影景枯寒

耕さむとなるも土ちく
土ありても力疲ち
出落を作らむ
農村を離ぜず
影景枯るる寒

一事為去る
悔ゆ微情を抱き
閨房詩を作る

（九月二十四日作）

一事為去る
悔ゆ微情を抱き
閨房詩を作る

（九月二十四日作）

○癸未十月二十日於ニ二十四番の
疑獄ヲ

十手まへの中村を
身ヨ囚衣を纏ひ
手錠は免
強盗犯と繋がれて

風強く雲ながれし秋雨の中を
蕭々として荒川を渡りしよ
誰か思はむ
今宵は いのちあるを
今宵は いのちありて
老を養ふ蕎麦の宿にて
風は東かたより東山の麓
陽は暖かなる南齋の縁
久しく麓を眺めて
破屋の裏より聞ゆ
初めて起きて 陣街を行き
思ひえて 咲く黄菊白菊

牛久市の女の家を紀行（ルビー）玉の小玉（ちづま）
蓮科の友の齋を眺（うるち）
駝絵の蕎を美味し
紅飯の青を青蔬赤飯

青蔬赤飯
蕎麦白菊
窮の瓶北が白虎青龍に倣ひ
聊かこの生涯の「窮者」に擬す
（十八年十月二十七日作）

玉盤有偶餐
土鉢楚宛瓦盒莫因暴食
美斎門偶餐自有窮者愛
七元吉就一口茶（偶以董斎
吉斎為吉就白虎論）

○味噌

はんつき
閑常の客人　味噌酢餅の
四月の時節もうひみ行きけれど
客のかすん
懐面の名とわかる鶴とを見ならべて
三月の五月下の何かささやきん

「長さはまさおるさにすかや
おもりのさかろ」
おのとおせ世辞云ひおのの
ちとまつらるる実たちを意ーとか
ちけときかやとも何とも云はで
たわわれを定量の信額をれ少量
人並はづれて時鳴たーちむ　力飛

こころを喜ひ房みつへ
小橋をげて斉をおで
回り巻ーと　毛屋を立ち宮已
色菊一本
三十銭とりかを買ひ求め
世ちを　こごめて早芝ーて
暑りかちある宮の

高大路を刻みつつ
かはらんとするの せやうを
ひとりゐのすみかをさして鳴りけり
鳴りて見れば 机べの
火鉢にかけし見芋の
はや軟く煮えてゐる

ゐるもとの方のやの せとの芋をとて
美味しそうな赤芋の
大きなるが はや煮えてあり
持ち帰りて白味噌煮
俵かばかりの砂糖まぜ
芋にかけて煮て食べうぶ
どろどろに とけし熟すく芋

ほかほかと　瑞気たてて
美味これに勝るもなく
うれし　うれしと　ひとりごち
はるかなる　餉を絶へたりつ
この徒食の身を顧みて
わが職業のかなしかり

めぐみ豊けさを喜べど
ひとりも　みづから喜べり

（本年一月元旦作）

○甲申四月述懷

天涯の一角に
あり年病を得て
まゆみ角の幸福を
あこがれ病院に臥せり
いま年の極見たるに

老妻しまて
海の日あと
とりくみまもどきれ月
毎日すいよ八十四
いろ山川をへだてて
西の方二百里
あか ふるさとを信ぜ

ひとり赤雅亭のほとゝ
世を思ひ
妻を思ひ
子を思ふ

曙古の大歌
世は程へるかなと
わかいほを

ひろまるほ　しづか

人はかかるさかひを哀れと
あれ敷て　鬱屈の色きを疑はむ
心を風雨きき者の身ひけぼの
大古の湖の靜けさ似こそ

（まを一月年作）

○金つまを

金靜かにして大古のわく
悠曠かにして小春を似こそ
結ふ君　思ふ　大空せよ
羅羊　今年　熟せを

（二月十六日）

○表態

もの書くゝる 悟めを文 詩作 文 詩むす

悟めを もの書く ものゝ ありざま 由

○こゝろの ゆくさと

ひとを 老りて こゝろの

ゆくさとりの へるや

力よあるう 所もに 見ひ

山こえ 里こえ 川こえて

夢路の産土をたのみくら
五十餘年のたひごろも
つひのやどりをねぎすてん
憂るかも　待のうすらぶ

（天保七月五日作）

○いかるがは
いとをつくらば
ひんかしを
まるまるあけて
三筆の作

みちみちて
たれひとりとも

紅梅の
春を告げぬ
半ば折りつつ

（二月十五日作）

○かがやき

二坪ばかりなる小庭
梅咲きて
数多の蕾を
開き咲きたり
今は盛り

藤岩長吉と橋屋七
人立ち一日の
めぐりくるらし

（二月十九日）

○ゆづみ

お前はこの頃度々ちらと
二階への梯子段を
タタタタタタと踏みゐらし
就ひの酒を酌つゆらひ
舞踏ひも考へるやうな
上せつくりつくりへらへら
何かをんなを慕ひ
少しおれ思義を思つてゐるのかな

＊

あれを お前が 考えごとの、
お前の 眼が 考えごとか
けさ 二階の 押入を 開けて 見て
僕は ぼんと 驚いて
勝藤 たる 老眼を 据えて 見れば
蒲団と 蒲団との 間に 声も 立てず

茶色の 蒲団が うやうやと 畳まれて
ちょっと その 上等 蒲団を
老婆が 使ったら お前を 恨んで

＊

僕は 先ず 座敷の 土を 踏つき
そして 手帛と 座布を 敷いて
二階へ 上がって 来た

だが まく男ひ直てしてあると
窓の障子を少しばかり開せ

＊

お前の小さなものを
僕がふ憫み者つくを感謝しら
それを大きな向きしひごで
あんな かはいいものを と言ふおらうが

僕みたも気味が悪くなる
鶏を途端に風呂敷をぶっかけしまはしてある
僕はとても二度と見る気がしない
障子の隅が開けてある
どこへ早く引っ張せよ

（大正六月十六日）

解

説

昭和十九年七月二十七日附、河上先生からの御手紙、

『貴譯『地球誕生物語』有難く拜受いたしました。私は最近友人の送つてくれたレヰ・ブルュルの『未開社會の思惟』を非常な興味をもつて讀み了へ、それに續いて、更に他の友人の讀んで見ろとて貸してくれたエリゼ・ルクリュの『世界文化地史大系』の第一卷を讀み始めたところですが、第一章人類の起源、第二章地的環境論といふやうな章で始められてゐるこの書のことですから、偶然にもそれは今度頂いた貴譯書と甚だ緣近く、何だか『未開社會の思惟』を手始めとして、段々古いところへ遡つてゆくやうな、自然の順序を授つたやうな氣がいたして居ります。私はああした題目については青少年以上に全く無智でありますから、そのうちぜひ拜讀したいと樂しみにいたして居ります。

ゴツホ關係の書籍も有難く存じました。

尙、同時に御直投下さいましたトマト、實に美しい色をしてゐますので、娘がそのため

に分けてくれた新鮮な紫の茄子をそれに添へ、藍地に竹模様のついた純白色の鉢に盛り暫く床の間の、楊子敬の書の前に飾つて眺めて居りましたが、段々熟して來て、折角の美味を損じさうに思へて來ましたので、ポツリポツリ賞味させて頂くことにいたしました。青果のひどく乏しき今日、洵に結構なものを、しかも澤山に頂戴し、おかげさまで飢腸を霑すことが出來ました。これまた厚くお禮申上げます。何かお禮にお目にかけるものはないかと考へて居りますが、貧居有るところなしです。で、をこがましい次第ですが、下らぬ拙詩を若干書き集め、二、三日中に別封でお送りすることにいたしました。御直投を辱いたし、喜びの餘り、恥をも忘れたものと思召し下され、老人の圖々しさ御一笑下さらば本懐に存じます。

不具』

このお手紙の全文を引いたのは、これによつて當時の先生の御日常の一端がはつきりと偲ばれると思つたからである。

お手紙に、拙詩若干書き集め、とあるのが『雜草集』となつて數日後屆いた。

昭和十八年七月頃から十九年六月頃までの作品で、戰爭の渦は先生のお住ひになる吉田の小路にも畫となく夜となく轟々と卷立つて流れてゐる時分のことではあるが、ここには澄みきつたひとつの高い心境がある。人間愛の精神がある。

一身瘦盡鑠存骨　萬卷拋來空賦詩
憐爾刑餘垂死瘦　半世得失待誰知

これは昭和十四年の暮、東京中野にお住ひの頃の作で、老人の負惜み、とお手紙に書かれたが、同じくその時分の、落葉の賦、一連の作と思ひ合せて、ただ悲痛胸を打つばかりであるけれども、『雜草集』では、先生は若々しくなられ悠々としておいでになる。到達したかかる境地の精神に孤獨の寂寥といふものがあり得やうか。戰爭中、先生は忘れられてお獨りの暮しではあつたが、私はその孤獨こそ先生を豐かにし樂しくしたのではなかつたかと思ふ。

——私はしたいと思ふこと、せねばならぬと思ふことを、
力相應、思ふ存分にやつて來て、
今は早や思ひ殘すことも無い。
私は自分の微力を歎ずるよりも、
力いつぱい出し切つたことの滿足を感じてゐる。
『御苦勞であつた、もう休んでもよいよ』
と私は自分を自分でいたはる氣持だ。
牢獄を出て來た後の殘生は、
謂はば私の生涯の附錄だ。
無くてもよし、有つてもよし、
短くてもよし、長くてもまた强ひて差支へはない。
私は今自分のからだを自然の敗頽に任せつつ、

衰眼朦朧として
ひとり世の推移のいみじさを樂しむ。

先生の御長女、京大羽村教授夫人へおくられた長詩の一節であるが、淡々としてしかも激しく、ここにもまた、大いなるひとの生きた肖像がある。

店頭にあつた一冊の平凡な手帖は先生の素朴な意匠によつて息吹きを與へられ、愛らしい風格を身につけて『雜草集』と生れかはつたが、出版されるものは、それの原寸大の復刻である。

一九四六年五月十六日　　鮫島鱗太郎

序

わきもこのたちしより
ひとりあばらやにすみ
秋をながめて
冬をしのぎて
春をむかへて
夏をむかへて
しづかなるあさなゆふなを
おきふしのこころのくまに
うつくしきはなもひらかず
かぐはしきかをもたなく
わびしらにもえいでし
くさぐさのしこつぐさ
ひなぶともやをかしきを
ふたつみつはちにうつしつ

○大連に立てる妻を思ひて

吾子病みて吾妹子遠く大連に立てる
夜すがら雨ふりにけり　（十八年七月二日）

からくににわたる船ぬち海ながめこころ
馳すらむ北に南に　（七月三日）

今ははや鴨綠江を渡りすぎ滿洲の
平野窓に見るらむ

さ夜ふけて奉天發し汽車に乘り寢
ねがてにして着くか沙河に　（七月四日）

○間　臥

欲耕無土　耕さむとするも土なく
有土力疲　土あるも力疲る
不作米藷　米藷を作らず
不辨農時　農時を辨せず
萬骨枯處　萬骨枯るる處
一事無爲　一事爲すなく
唯抱微倦　唯だ微倦を抱き
間臥作詩　間臥詩を作る

（九月二十四日作）

○癸未十月二十日滿六十四歳
の誕辰に

十年まへのけふは
身に囚衣を纏ひ
手錠はめ
強盜犯と繫がれて
風強く寒かりし秋雨の中を
蕭々として荒川を渡りしに
誰か思はむ
今なほいのちありて
老を養ふ舊都のほとり
風は柔かなり東山の麓
陽は暖かなり南齋の綠

久しく熱を病みて
破屋の裏に間臥し

初めて起きて隣街に行き
買ひえて歸る黃菊白菊
牛久なる女の寄せし紅玉の小豆
蓼科や友の齎らせし眞珠の粳
配給の菜を羹にして
朝餉にす青疏赤飯
青疏赤飯
黃菊白菊
窮に甌北が「白虎青龍」に倣ひ
聊かこの生日の「窮奢」に擬す

（十八年十月二十日作）

趙翼待儒餐
土銼煤爐老瓦盆莫因鼎食
羨豪門儒餐自有窮奢
白虎青龍一口呑（俗以荳腐青菜爲青龍白虎
湯）

○味　噌

關常の店へ臨時配給の
正月の味噌もらひに行きければ
店のかみさん
帳面の名とわが顏とを見くらべて
そばのあるじに何かささやきつ
「奥さんはまだおるすですかや
お困りどすやろ」
などとお世辭云ひながら
あとにつらなる客たちに遠慮してか
まけときやすとも何とも云はで
ただわれに定量の倍額をくれけり
人並はづれて味噌たしなむわれ
こころに喜び勇みつつ
小桶さげて店を出で
廻り道して花屋に立ち寄り

白菊一本
三十錢といふを買ひ求め
せなをこごめて早足に
曇りがちなる寒空の
吉田大路を刻みつゝ
かはたれどきのせまる頃
ひとりゐのすみかをさして歸りけり
歸りて見れば机べの
火鉢にかけし里芋の
はや軟く煮えてあり

ふるさとのわがやのせどの芋ぞとて
送りこしたる赤芋の
大きなるがはや煮えてあり
持ち歸りたる白味噌に
僅かばかりの砂糖まぜ
芋にかけて煮て食へば

どろどろにとけて熟き芋
ほかほかと湯氣たてて
美味これに加ふるなく
うましうましとひとりごち
けふの夕餉を終へにつつ
この清貧の身を顧みて
わが殘生のかくばかり
めぐみ豐けきを喜べり
ひとりみづから喜べり　（十九年一月元旦作）

○甲申正月述懷

天涯の一角に
あつき病を得て
すでに年の半ばを
あこは病院に臥せり
いとし子の病見むとて
老妻もまた
海のかなた
とつくににとどまれり

母はすでに八十四
いく山川をへだてて
西の方二百里
わがふるさとに住めり
ひとりわれ京のほとりに在り
母を思ひ
妻を思ひ
子を思ふ

曠古の大戰
世は狂へるがごと
わがいほは
ひるなほしづか

人はかかるさかひを哀めど
われ敢て黎明の近きを疑はず
心は風なき春のあけぼの
大古の湖の靜けさに似たり
（十九年一月五日作）

○冬ごもり

屋靜かにして大古の如く
爐暖かにして小春に似たり
請ふ君旦らく安坐せよ
煨芋今半ば熟せり　（二月十六日作）

○老　態

もの書くに倦めば文讀み文讀むに
倦めばもの書くわれのおいざま

○こころのふるさと

ひとは老いてこころの
ふるさとにかへるとや
力にあまるおもに負ひ
山こえ野こえ川こえて
夢路の塵にそまりたる
五十餘年のたひごろも
つひのやどりにぬぎすてて
憧るるかも詩のうましぐに
（十九年六月五日作）

○いほりつくらば

わがために
いほりつくらば
ひんがしに

まるまどあけて
三竿の竹

みなみには
ただひともとの
紅梅の
春を忘れで
半ば朽ちつつ

（六月十一日作）

○わがやど

二坪に足らはぬ小庭
梅咲きて
散りにし跡は
椿咲きけり

今ははや
梅若葉して椿落ち
人立ちし日の
めぐりくるらし

（六月十日作）

○ねづみ

お前はこの頃夜になると
二階への梯子段を
タタ　タタ　タン　と踏み鳴らし
祝ひの酒に醉つぱらひ
舞踏でもしてゐるやうに
上つたり下つたり
何がそんなに嬉しくて騒ぐのかと
少し不思議に思つてゐたが

×

あれはお前が產んだのか
お前の娘が產んだのか

けさ二階の押入を開けて見て
僕はほんとに驚いたぞ
朦朧たる老眼を据えて見れば
蒲團と蒲團との間に聲も立てず
鼠色の團子がうぢやうぢやと蠢いてゐる
とつときの上等蒲團をお前は無斷で
產褥に使つたね

×

僕は先づ庭隅の土を掘つた
そして手箒と塵取を執つて
二階へ上つて來た
だがまた思ひ直して下りて來て
窓の障子を少しばかり開けて

×

お前の小さなものを
僕が不憫に思つたと感謝したら
それは大きな間違ひだぞ
あんなかはいいものをと云ふだらうが
僕には氣味が悪いのだ
驚いた途端に風呂敷をぶつかけたままに
してある
僕はとても二度と見る氣がしない
障子の隅が開けてある
どこかへ早く引つ越せよ

（十九年六月十六日作）

昭和二一年六月一五日　印刷
昭和二一年六月二〇日　發行

賣價稅込　金一〇圓

著作者　河上肇

京都市中京區三條通烏丸東入
株式會社大雅堂取締役社長
發行者　和田忠次良

京都市中京區柳場馬通三條下ル
印刷者　鈴木直樹

京都市下京區七條御所之内西町一
印刷所　株式會社似玉堂

京都市中京區三條通烏丸東入
發行所　日本寫眞印刷有限會社

振替口座京都一〇六一番
電本七一二〇、七一二六―七一二九番
日本出版協會登錄A一一六〇二一號
株式會社大雅堂

東京都神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給統制株式會社

終